

2018 年度 センター試験 国語（現代文）（本試験） 分析

全体概況

試験時間 国語全体で 80 分

大問数・解答数	大問数：2 題	解答数：20 問
難易度の変化（対昨年）	○ 難化 ○ やや難化	○ 変化なし ● やや易化 ○ 易化
問題の分量（対昨年）	○ 増加	● 変化なし ○ 減少
出題分野の変化	○ あり	● なし
出題形式の変化	○ あり	● なし
新傾向の問題	● あり	○ なし

総評

評論が前年よりもやや易しく、全体として出題レベルは易化した。評論はデザインの働きを通じて文化心理学を論じた文章で、文章量は前年とほぼ同じであった。文章自体が前年より読み易いことに加えて、各設問の選択肢が前年よりも選びやすく作られており、その点で取り組み易いといえる。問 3 で、従来にはなかった生徒同士の会話文の中にある空欄を補充させる問題が出題された。小説は前年同様、小説の一節を出題する形であり、文章量も前年とほぼ同じであった。前年は傍線部問題が 3 題であったが、本年度は 4 題と例年の形に戻った。設問のレベルは前年とほぼ同じレベルであった。

大問別分析

大問	出題分野・テーマ	配点	コメント
第 1 問	有元典文・岡部大介 『デザイン・リアリティ — 集会的達成の心理学』	50 点	デザインすることは世界を人工物化することであり、我々の現実には文化的な人工物に媒介されたものであると言える。そうした認識に立った上で、人間のこころの現象は文化と不可分であり、心理学はその点を踏まえ文化心理学として再記述される必要があることを論じた文章である。文章そのものは読み易く論旨も明快で、読み取りは難しくない。問 3 の会話文形式の出題は目新しいが、問われていることは他の設問と同様に本文との照合であったため、とくに難しいわけではなかった。
第 2 問	井上荒野 『キュウリいろいろ』	50 点	35 年前に息子を亡くし、前年に夫を亡くした女性が主人公の小説である。彼女がはじめて一人でお盆を迎えた場面と、夫の写真を夫の実家の町に住む同級生に届けに行き、夫の通った高校を見る場面が描かれている。出来事を通して主人公の夫への心情がつつられている。非常に読み易い文体であり、読み取りに苦勞することはない。傍線部の設問は理由説明が 2 題、心情（心の動き）が 2 題で、どれも選択肢は判別しやすく取り組みやすかった。

2018年度 センター試験 国語（古典）（本試験） 分析

全体概況

試験時間 国語全体で 80 分

大問数・解答数	古文：6 題（8 問）	漢文：6 題（8 問）
難易度の変化（対昨年）	古文：○ 難化 ○ やや難化 ● 変化なし ○ やや易化 ○ 易化 漢文：○ 難化 ○ やや難化 ● 変化なし ○ やや易化 ○ 易化	
問題の分量（対昨年）	古文：○ 増加 ● 変化なし ○ 減少 漢文：○ 増加 ● 変化なし ○ 減少	
出題分野の変化	古文：● あり ○ なし / 漢文：● あり ○ なし	
出題形式の変化	古文：● あり ○ なし / 漢文：○ あり ● なし	
新傾向の問題	古文：● あり ○ なし / 漢文：○ あり ● なし	

総評

古文は、昨年に引き続いて近世からの出題であるが、本試験では 2001 年度以降 17 年ぶりの歌論の出題で、このジャンルに触れたことのない受験生はとまどったかもしれない。また、例年出題されていた人物把握関連や和歌の解釈の設問がなかったために、過去問対策を生かすことができず、この点でもとまどったかもしれない。しかし実は、文章自体には難解な表現や文法が含まれていなかったため、落ち着いて論理読解できた受験生ならきちんと得点できたはずである。問 2 の文法問題は、2017 年度追試験に同形式で出題されているが、本試験では初の出題形式である。傍線部解釈問題が一問も出題されなかったのは初めてである。

漢文は、本試験では 1999 年度以降、19 年ぶりの史伝・史書からの出題である。2004 年以降、物語的部分を具体例とし、それに著者の意見が述べられる展開の文章が出題されていたが、本年度は登場人物二人の会話文が続き、著者の意見は述べられていない。そのため、例年出題されていた主張理解の設問は、著者ではなく、会話文中に述べられる話者の意見の把握に変わった。文章・設問の難易度は、例年と変わらなかった。

大問別分析

大問	出題分野・テーマ	配点	コメント
第 3 問	古文『石上私淑言』 ※江戸・本居宣長の歌論	50 点	二つの問答を、計 6 段落で構成している文章である。「恋の歌の多さ」について意見を述べたあと、それを受けて「情と欲と恋と歌の関連」へと話題を発展させている。二つ目の問答では、歌と漢詩の違いについても言及しているところに、本居宣長の国学者としての見解を垣間見ることができる。答を述べた部分を、対比・因果・逆接といった論理展開に注目して読解することがポイントであった。 本年度の設問の特徴は、難関な語句・表現が含まれた選択肢や内容的に迷う選択肢がほとんどなかったことである。
第 4 問	漢文『続資治通鑑長編』 ※北宋・李燾の史書	50 点	昨年の 198 字とほぼ同じ 187 字であるが、段落分けがない一場面の文章である。場面・話題転換がない文章が出題されたのは、1999 年の史伝以降 19 年ぶりである。本年度は、寇準の間に嘉祐が答える形式で、主題は嘉祐の見識の高さである。文章中に主要句形・重要語句がほとんど含まれない文章であり、問答の主旨をつかむことができるかどうか読解のポイントであった。